



大浜神社 仁王堂 (東近江市能登川町伊庭)

地域でのフィールド調査・研究の情報

身近な自然と暮らしの歴史 —総合研究「自然観」の取り組み

専門学芸員 橋本道範

専門分野を超えて

すべての活動の基盤に研究を据えている琵琶湖博物館では、さまざまな分野の研究を行っていますが、それらのなかで最も特徴的なのが文系・理系の枠を超えて行っている「総合研究」です。今回は、そのなかで、今年度よりスタートした総合研究「前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時代的変遷に関する研究」を紹介します。

この研究は、現在の自然のあり方および自然に対する地域の人々の自然観が、縄文時代以降どのように変化しながら形成されてきたのかを明らかにすることを目的としたもので、歴史学、考古学、民俗学、美術史学、社会学、博物館学の文系分野

と地学、古生態学、生態学、造園学、水産学の理系分野の研究者、研究協力者24名のチームで構成されています。これまで研究会を重ね、次の三つの視点に絞って研究を進めることにしました。

三つの視点

一つ目は、人間が関わってきた自然がどう変化してきたのかを明らかにする研究です。琵琶湖地域では、縄文時代以降、人間が関わらなければスギが優っているはずにもかかわらず、人間が関わり続けることによって特定の植生が維持されてきたことが明らかになっています。そうした人為的な植生がどう変化したのか、カワウやカヤネズミなどの動物や人間を含めた生態系がどう変化したのかも明らかにしたいと思います。



写真1：琵琶湖真景図／琵琶湖博物館所蔵

二つ目は、人間の自然に対する認識がどう変化したのかを明らかにする研究です。室町時代の貴族山科家の周辺では、当時魚類の王様はコイと認識されていたにも関わらず、フナに旬が成立し、コイよりも多い数の贈答が行われていたことが明らかになりました。このような動植物に対する価値付けや地震などに対する災害観がどう変化したのかを明らかにしたいと思います。

三つめは、自然に働きかける技術がどう変化したのかを明らかにする研究です。琵琶湖を代表する漁法といえるエリは、当初は産卵のために遡上する魚類を捕えるための大変シンプルなものでしたが、鎌倉時代頃を境にして、回遊する魚類も捕獲できるように効率化したと考えています。これは、限られた空間と資源を利用してより効率よく生業を営むための工夫といえますが、こうした工夫が、人間が関わった自然をどう変えたのかを明らかにしたいと思います。

リニューアルに向けて

以上、三つの視点からの研究を続けていますが、この成果は論文として公表するだけでなく、平成32年にリニューアルオープンを予定しているB展示「身近な自然と暮らしの歴史」でも紹介したいと思います。この展示では、自然と人間との関

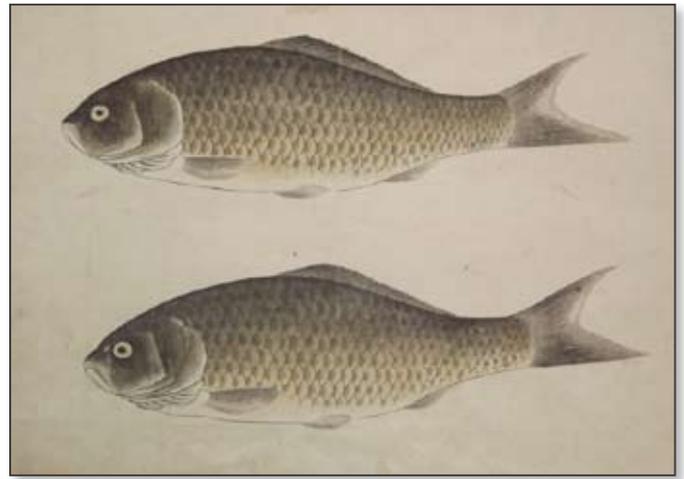


写真2：近江水産図譜／滋賀県水産試験場所蔵

わりの歴史を紹介したい、環境学習でも活用できる歴史展示を創りたい、もっともっと展示室で交流ができるスポットを設けたいなど、熱い思いで準備作業をしているところで、「琵琶湖地域のいま」「変わる自然、変わる暮らし」「人がつくった自然」「殺生をめぐる葛藤^{かつどう}」「船とともにある暮らし」「自然へのまなざし」という六つのコーナーを創りたいと考えています。

ただ、研究成果をそのまま紹介するだけでは展示として面白みがありません。多くの皆さんの多様なご意見やご助言が必要です。そこで、皆さんに展示づくりにご参加いただける仕組みをいま考えているところです。このリニューアルという大きな挑戦に皆さんも参加してみませんか？

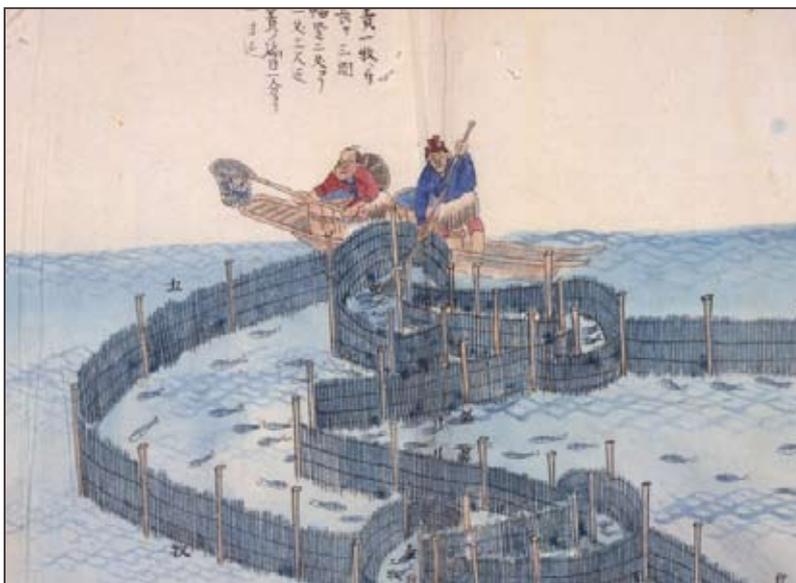


写真3：滋賀県管下近江国六郡物産図説一 滋賀郡・栗太郡／琵琶湖博物館所蔵

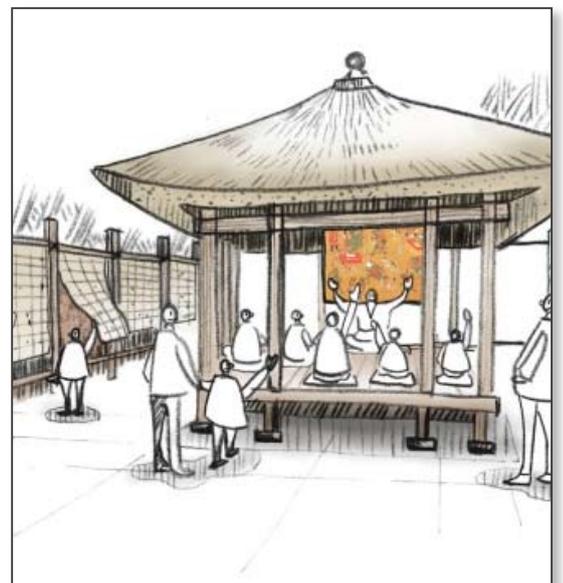


写真4：『新琵琶湖博物館創造基本計画』より

虫送り

学芸員 澤邊久美子

2014年7月6日、竜王町山之上地区において「虫送り」という行事がありました。虫送りとは、五穀豊穡を願って、穂が出る前のイネに虫がつかないようにという思いを込めた夏の農耕行事の一つです。夕暮れ時、松明^{たいまつ}を燃やしながら田んぼ道を歩きます（写真1）。アブラナやワラなどで編まれた長さ2m以上もある松明に、ご神灯^{しんとう}からいただいた火をつけ、次の人の松明に火を送ってから神社を出発します。鉦^{かね}や太鼓に連れられて、集落の子どもたちと一緒に1km程の距離を隣の集落に向かって歩きます。道中、松明の火が危うく消えそうになると、「下に向けえ」と集落の長老^{ちやうろう}が声をかけます。松明の火は、下に向けるとよく燃えて、上を向けると弱まるのです。そうして火の扱いを学びながら歩くうち、田んぼ道には白い煙が列になっていました。

「山椒と味噌と 茶釜の蓋（ふた）と 送ろう
送ろう 田の害虫（むし）送ろう」



写真1 虫送り 田んぼ道を歩く。

これは言葉の意味ははっきりと分からないそうですが、虫送りの時に歌われる歌だそうです。みんなで歌いながら到着地



写真2 松明に火がついたら、神社を出発！もらった火は次の人に送ります。

点まで着くと、隣の集落の人が待っていて、再び松明に火をつけると出発していきます。

無事、虫送りが終わった後は神社に戻り直会^{なおり}が始まります。長老から若手までが一緒にお酒を囲み集めます。引き継がれる集落の行事は、このような時間を人々が共有することによって伝承され維持されているのです。年々減っている虫送り行事、隣の集落がやめてしまえば続けられるか分からない状況となっています。「隣とも話し合いながら続けていきたい。」という山之上地区の方々の言葉が印象的でした。昔の人々、今の人々の思いをつなぐ1本の松明から、行事を通して地域の人々がつながりをもつ大切さを感じます。また、最近では火を扱うことすら少ない子供たちが、火の熱さや扱い方を経験するためにも続いてほしいものです。

油日湿原堆積物のボーリング調査

学芸技師 林 竜馬

昔の森のタイムカプセルを掘る

今号で紹介されている総合研究のテーマの1つである「人為的自然の通時的変遷」を明らかにするため、縄文時代以降の森林の移り変わりについての研究が進んでいます。過去の森の姿は、どの

ようにして明らかにすることができるのでしょうか？数100年前の森であれば、その姿が古写真に映っていたり、絵図に描かれている場合があります。しかし、絵図も残されていない時代については別の研究手法が必要です。私は湖や湿原の堆

積物の中に残された花粉の化石を調べることで、琵琶湖地域の森の変遷について明らかにしようとしています。

そのような研究を行うためには、まず長い期間にわたって泥がたまりつづけている湖や湿原を見つけて、専用の道具で孔を掘り、堆積物を採取する「ボーリング調査」が必要です。2013年12月に、甲賀市の油日湿原あぶらひでこのボーリング調査を実施し、深さ約3mの堆積物を採取することができました。放射性炭素年代測定によって、この堆積物の最下部は約3500年前にたまった泥であることが明らかになりました。今後この泥の中の花粉化石を調べていくことで、歴史時代をとおした湿原周辺での森の歴史や人の利用による影響が解明されていくことが期待されます。



写真：油日湿原でのボーリング調査の様子

【資料裏話 その15】 エビの佃煮のダンゴムシを探せ！

特別研究員 太田 悠造



写真：エビノコバン

エビ豆やエビの佃煮に時々紛れ込んでいるダンゴムシのような生き物を見たことがあるでしょうか？ これはエビノコバンというダンゴムシの仲間で、ヌマエビ類やスジエビの体表に寄生します。琵琶湖周辺では結構知っている人も多いのですが、他の地域ではそこまで沢山見ることはできません。

ダンゴムシの仲間は1万種ほどが知られていて、その仲間の半分す以上は海に棲んでいます。エビノコバンの近縁種もほとんど海に棲んでいて、魚やウミガメや色々な海洋生物にくっついて暮らしています。しかし、どこで繁殖しているのか、どのように世代交代をしているのかは不明のまま、現在私は、エビノコバンが沢山の琵琶湖で、その生態解明に取り組んでいます。エビノコバンも甲殻類こうかくですので、エビの佃煮に入っていたら、エビと一緒にいただいて下さい。

● 編集後記 ●

歴史や伝統を受け継ぐとは、記録に残す、体で覚えるなど、いろいろと方法はあります。現在に移り行く過程では、人の知恵と工夫、そして大いなる挑戦があったのかもしれません。(不熟)

鳥の目 魚の目 クイズ

● 「なんという調査でしょう？」 ●

あな孔を掘って湖や湿原の堆積物を採取する調査をなんと言うでしょう？

- ① カーリング調査
- ② ドリリング調査
- ③ ボーリング調査

答えは、紙面のどこかにあります。

◆ 巻頭写真の説明 ◆

ヨシ葎の大屋根を持つこの建物は、鎌倉時代に建てられたお堂です。現在は、「伊庭の坂下し」で用いられる神輿が収められ、たくさんの絵馬が掛けられています。